

様々な“満洲国”体験

— 満洲国の外交官と満洲国へ行った台湾人 —

中見 立夫

1. 満洲国外交官の“あしあと”

おそらく研究会、ないしは学会に参加する積極的な意義のひとつは、それまでお名前は知っていたとしても交際のなかった同業研究者と、あるいはいままで全く存じあげない好学の士と、会の活動を通じて面識をえて、人間関係そして知識のネットワークが拡大してゆくことにあろう。わたくしも、この近現代東北アジア地域史研究会に入ることにより、多くのあらたな知友をえることができたことへ感謝している。中南米史を専攻され、エル・サルヴァドル（エルサルバドル）と満洲国の外交関係について、発表された飯島みどり氏なども、そういうおひとりであり、彼女を介して、旧満洲国外務省関係者 OB 会の存在を知った。

いうまでもなく、満洲国は「傀儡」国家とはいえ、日本の植民地ではない。そこには国家政府機構が存在し、外務省もあった。正確に言えば、満洲国建国とともに、「外交部」が成立する。初代「総長」は謝介石、次長が大橋忠一であった。大同 3(1934)年に、「総長」は「大臣」へと職名の変更がある。康德 4(1937)年の機構改革によって、「外交部」は國務院所属機構の「外務局」となり、その長は「長官」となる。そして康德 9(1942)年に、再び「外交部」となり「大臣」が置かれる。そして 1945 年の崩壊を迎えたのだが、この間に満洲国と外交関係を樹立したのは、日本のほか、ローマ教皇庁、エル・サルヴァドル、イタリア、スペイン、ドイツ、ハンガリー、リトアニア、中華民国（汪精衛政権）、ルーマニア、ブルガリア、フィンランド、タイ、デンマーク、エストニア、クロアチアの 16 ヶ国。

ちなみに、満洲国外交部においては、日本外務省からの「出向」ないしは「移籍」者がいたが、独自の採用者もあった。そして戦後の日本外務省へ「復帰」あるいは「採用」されたひともちいて、このなかから、大江晃、田付景一、河野達一、広瀬節男などの諸氏が大使となっている。意外ともいえるべき人物としては、康德 9(1942)年時点では、調査司事務官であった大山聡氏がいる。戦後は大学教授となり、ネルーの『父が子に語る世界史』の翻訳をされ、つい最近亡くなられたが、その父親は大山郁夫。この時期、大山郁夫夫妻は日本の軍国主義化を嫌い米国に亡命しており、どういう経緯で、その

子息が満洲国の外務省に採用されたのであろうか。

いまに至るまで、そして最近益々、満洲国に関して、様々な関心とアプローチにより、多くの業績がでている。だが、こと満洲国の国際関係については、ナチス・ドイツの対満洲国外交を研究した、田嶋信雄氏の『ナチズム外交と「満洲国」』（千倉書房、1992年）や、前記飯島氏の研究、あるいはソヴィエトの満洲国への政策についての寺山恭輔氏などの研究はあるものの、つまり満洲国に対する政策や外交の研究はあっても、満洲国の外務省、あるいは「外交」活動に関する研究は、まずなかった。「傀儡」国家の外交や、外務省などは研究の対象にあたいしない、といってしまうとそれまでのことだが、逆に「傀儡」国家、あるいは満洲国とはなんであったか、さらには外交機関の機能と役割はなにか、という視点に立てば、満洲国の外務省も「外交」も、それなりのテーマとなりえよう。

戦後も半世紀をすぎており、率直に書かせていただくなれば、旧満洲国外務省関係者のOB会がいまだに存在していること自体に驚いた。いまでも続く会誌『外交部同人会記録集：あしあと追録』は、正規の雑誌というよりは、同人が編集子のもとに原稿を送り、それを編集し複写してメンバーに回付するという形式をとっている。平成17年5月までの「送付予定表」が送られてきたが、やはり同人の高齢化・減少傾向は、如何ともしがたいようで（実は、同人の方どなたともお会いしたことはないが、おそらく平均年齢は80歳をこえているであろう）、最近は独自の回想、通信というよりは、他雑誌記事の転載がほとんどであるものの、同人諸氏の御壮健をお祈りしたい。

2. ドイツに残った満洲国外交官、劉茂才について

さて御好意で、前記『あしあと追録』のバックナンバーをいただいた、というよりは複写させていただいたが、記事のなかから、おもいがけない人物の名をみいだした。ベルリン駐在満洲国公使館に在勤した書記官（名簿が現存する康德9年時点では、官職は「高等官試補」）のひとりに、劉茂才があげられていた。劉茂才と聞いて、ピンとくる方は、近現代東北アジア地域史研究会の会員には、まずおられないとおもわれるので、わたくしの知る劉茂才という人物についてしるす。

いまを去ること30年近くまえ、わたくしは、故護雅夫先生の東京大学における東洋史学演習にださせていただいていた。その年度（たしか1973年）のテーマは、「西突厥伝」および関連する文献を読むことであり、わたくしにはロシアの学者、グミリョフの論文があてられた。護先生は、グミリ

ヨフの両親は、名高い文学者であり、かれ自身の文章も、両親の影響をうけてこっている、とあらかじめ注意された。そのころの、そしていまでも拙い、わたくしのロシア語解読能力では、四苦八苦しながら読んだことを記憶する。護先生はレニングラード大学客員教授時代に、グミリョフとも親交があり、自宅に招かれたこと、そのライバルともいべきクリヤシトルヌイとの確執について、あの独特なユーモラスな口調で語られたことを、いまなお鮮明におもいおこす。その後、わたくしは就職して度々、ソ連ついでロシアへ赴き、クリヤシトルヌイ氏とはお会いする機会があるが、グミリョフ氏の方はとうに亡くなられていた。ただ、その名声は、死後ますます高まり、一般書店においても、その著述が並べられている。おそらくグミリョフの作品は一般うけする、とくに昨今のロシアにおける“ユーラシア主義”の台頭とも関連するとおもわれるが、ともあれロシアの本屋の書棚でグミリョフの著作を眼にする度に、護先生へのおもいでとともに、懐かしく感ぜられる。

話しはいささか横道にそれたが、当時の西ドイツには、Liu Mau-tsai, つまり劉茂才という学者がおり、その著作、*Die chinesischen Nachrichten zur Geschichte der Ost-Türken (T' u-küe)*, 2 Bde (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1958)は、護先生の書評によれば、「“6 - 11 世紀の中国史書に散在している東チュルク族—中国では突厥と呼ばれた—関係の史料を、できるだけ漏れなく集めて、歴史家の使用に供するため忠実にドイツ語訳し”(1 頁)、それに、みずからの研究を付したもので、[中略]、きわめて意欲的な労作」(護雅夫「劉茂才の突厥史研究」、初出は『史学雑誌』72-3。同氏著『古代トルコ民族史研究 1』[山川出版社, 昭和 42 年], 590 - 611 頁に所収)、と評価されていた。護先生は 1950 年代末の西ドイツに在外研究員として滞在され、当然、劉氏とも親交があったが、もうひとり戦前のドイツに留学され、戦後のドイツ学界ともつよい絆があった言語学者、故村山七郎氏も御存知であり、劉氏について、「ボン大学でシナ学を教えている奉天生まれの、日本人と同じくらい日本語の上手な」人物としてあげ、さらに「劉茂才氏について言えば氏は突厥史研究の業績によってボン大学でハビリティーレン、つまり正教授になる資格を獲得された。1965 - 66 年私の滞独中、劉氏は東洋人としてドイツの大学でハビリティーレンした最初の東洋人として学界で大評判であった」(村山七郎「書評：護雅夫著『古代トルコ民族史研究 1』」『東洋学報』50 - 4)と紹介している。

前記授業で、護先生はある日、いま劉茂才が日本に来ており、来週、ここで話しをしてもらおう、といわれた。わたくしは、つぎの授業のときを楽しみにしていたのだが、護先生は依頼されたものの、劉氏は大学を定年退職されての旅行であり、長年苦勞をかけた夫人への慰勞のため(?)、とのこと

で辞退され実現しなかった。(つまらぬことばかり、よく覚えている奴だとお笑いめさるな) わたくしは、いささか残念におもったものの、やがて研究関心も、近代史方面へと移ったこともあり、劉氏のことは意識のなかから消えてしまった。

おもえば、戦後の西ドイツに、日本語を解する中国東北地方出身の中国人がおり、突厥史を研究したということ自体が、不思議であった。もっとも、当時のわたくしは「茂才」という名が、中国人のあいだに多いかどうかは知らなかったが、かの「番漢合時掌中珠」の編者、骨勒茂才と同名であることに興味をもった。しかし、劉茂才氏のバックグラウンドなどには、ついぞ考えもおよばなかった。そして、『あしあと追録』を拝見して、はじめて劉氏の履歴がおぼろげながらみえてきた。おそらくは、満洲国外交官としてナチス・ドイツ崩壊のときをむかえ、日本の外交官ともども英米連合軍に抑留されて、そのまま西ドイツに残留したか、一旦は中国に帰国し、戦後に西ドイツへ戻ったのかは不明ではあるが、ともあれ、外交官時代に身につけた語学能力を生かして、中国語教師のかたわら、上記著作を発表し正教授資格をえられたと考えられる。劉茂才が戦前において満洲国の外交官であったことを知ってのち、ドイツへ赴いた折に、何人かの友人のドイツ人東洋学者へ、劉氏の消息を聞いてみたが、年配の方は名前こそ覚えていたものの、大分まえに亡くなったらしい程度のことしかわからなかった。もとより、obituaryなどでておらず、また戦前の活動はおろか、遺族のこととて聞いたことがないという。

ちなみに、劉氏と交際があった村山七郎氏も、もとはといえば、外務省の語学留学生としてドイツに渡りベルリン大学に学んだ。そこでアルタイ言語学に関心をいただき、戦後は大学教授に転身した。あるいは、劉氏と村山氏との交友は、満洲国外交官と日本外務省留学生の間柄から、すでに戦前のベルリンにはじまっていたのかもしれない。村山氏の晩年の著作に、『クリル諸島の文献学的研究』(三一書房、1987年)があり、すぐれた業績であるが、氏の経歴をおもえば、このような本を書かれたことを奇異とするには当たらない。

なお、ボン大学でモンゴル語教師をしていたハルトード氏は、満洲国(ないしは蒙疆政権)に関係のあった人物で、戦後は日本滞在ののちボン大学に就職した。その後任となるラシドンドグ氏は、戦時中は重慶で活動した国民党系のモンゴル人。さらに米国ないしは英国でモンゴル学を教えたモンゴル人をみると、インディアナ大学のハンギン氏は北大卒で徳王の秘書。リーズ大学のオノン氏は東洋大学卒で徳王の親衛隊長。ブリガムヤング大学のジャクチッド氏は、早稲田大学に留学経験があり、蒙疆政権の官吏となったが、

同政権の重鎮、呉鶴齡の親族。カリフォルニア大学にいたウネンセチン（包国義）氏は、蒙疆政権の大臣であったサインバヤル（包悦卿）の子息、というように、いずれも、なんらかの形で戦前の状況を引きずり、戦後は欧州、北米に活動の場をみいだしたのであった。

3. 日本に“引き揚げた”満洲国外交官、玉聞精一のこと

そもそも、満洲国外務省のスタッフのうち、大臣などの政治任命ポスト、そしていわゆる「内勤」のひとをのぞき、「外交官」といえる立場にいた人物のうち、日本人（日系）以外は何人ぐらいいて、どのようにリクルートされたかは、よくわからない。それらのひとの戦後における状況についても、前記劉茂才氏、そして現在の中国における「民族識別」にもとづけば、シボ族出身というべき玉聞精一氏などは、例外的に戦後の軌跡をある程度まで確認しうる人物である。

玉聞精一氏は、1908年、当時の名称では新疆省（東トルキスタン）伊犁地方惠遠城のうまれ。25年にウルムチの新疆省立中学校を卒業。ついで28年にはアルマ・アタ（現在のアルマトイ）の州立中学を卒業。ふたたびウルムチに戻り、31年に新疆省立露文法政学院を卒業。新疆省政府から派遣されてハルビンの中東鉄路局附属工業大学に留学し、33年に卒業。「たまたまその年、彼を派遣した新疆省政府が崩壊したので、郷里に帰ることを断念、同年来日した。日本では東京に住み、鉄道講習所に入所、翌1934年同所を卒業。在日満洲国公使館で外務局【正しくは、当時は外交部】の採用試験に合格。1935年満洲に帰り外務局【同じく外交部】に任官、以後終戦まで勤務した」（山本謙吾著、アジア・アフリカ言語文化研究所編『満洲語口語基礎語彙集』[東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1969年]、9頁）という人物である。この履歴からわかるように、シボ語（満洲語口語）のネイティブ・スピーカーであるとともに、ロシア語、中国語、そして日本語にも通じていた。

ある日のこと、満洲里における国境会談に関する新聞記事に紹介された玉聞へ注目したのが、ハイラルに滞在していた言語学者、服部四郎（のちに東京大学文学部教授、日本学士院会員、文化勲章受賞者）であり、1935年5月に会い、服部が「長い間探し求めていた満洲語を流暢に話す満洲人であることを確認」した。服部は、アルタイ語研究のため満洲国に赴いたのだが、この35年時点でも、満洲国内で「満洲語を流暢に話す満洲人」をみつけることが困難であったことがわかる。玉聞精一は、新疆のシボ族出身ゆえに口

語会話が可能であった。ただ、その後、服部は玉聞に会う機会もなく敗戦を迎えた。服部は戦後まもなく渡米し、1951年にはジョン・ホプキンス大学でモンゴル語の研究をしていた。当時の同大学には、オーエン・ラティモアがおり、また前記したオノン、ハンギンらモンゴル人もそのもとへ集まっていた。そこへ、戦後は代議士となった大橋忠一がモンゴル人に会うため現れた。この大橋から服部は、「玉聞精一氏は大橋氏が世話をして、【戦前、日本から】満洲国に連れて来られたこと、敗戦後家族【夫人は日本人】とともに横浜に引き揚げて同地に健在であること」を知った。

服部は日本へ帰国後、大橋の仲介で玉聞と再会し、かれをインフォーマントとする言語調査が、服部と山本謙吾によりはじまった。しかし、服部が多忙となるにしたがい、次第に山本の単独調査となっていくが、成果「公開の前には、私【服部】が玉聞氏について徹底的に検討する約束で、その準備もしてあったのだが、或極めて遺憾な事情から実現し得ないでいるうちに、山本君は……他界された」。そして、山本の遺した原稿をもとに、創設もないアジア・アフリカ言語文化研究所から、《基礎語彙集》シリーズ第一号として、『満洲語口語基礎語彙集』が刊行された。ある時期まで、日本の満洲史研究者、あるいは言語学者との交際はあったが、その後、かれの消息は不明となった。

もっとも、作家、司馬遼太郎は、1982年に横浜で玉聞に会っている。そのしるすところによれば、「昭和17年から満洲国の上海領事になり、戦後、上海で政治犯の疑いで裁判を受けたが、釈放され、妹さんの一人が台湾にいる（当時、国会議員夫人）縁で、とりあえず台湾にわたった。昭和25年、日本にきて、貿易会社で主としてソ連関係の通訳や貿易業務にたずさわり、昭和32年帰化した。……私【司馬】と会ったときは、公団住宅に住み、悠々自適といった境涯にあられた。ついでながら、亡くなられた夫人も、いまの夫人も日本人で、女一人、男三人のお子さんがおられる」（司馬遼太郎『韃靼疾風録』下巻〔中央公論社、昭和62年〕、519頁）とある。

ちなみに外交部関係名簿によれば、玉聞は1937年に政務司属官（委任三等七級）であり、ついで39年には駐在蒙疆代表部主事、さらに42年は駐上海総領事館主事として名があげられている。「主事」とは、総領事館の場合、総領事、領事、副領事、高等官試補の下に位置し、つまりノン・キャリア一般職の職称であったようだ。

玉聞氏のような場合、満洲国官吏としては当然に「満系」に分類されていたのだろうが、きわめて特異な履歴でもある。ともあれ夫人が日本人、そして新疆、すなわち東トルキスタンのシボ族出身ゆえに、結局は中国に留まらず日本へ「引き揚げ」たのであろう。いまでも御存命であるとすれば、90歳

なかばになる。

4. 中国に帰った満洲国外交官、王替夫の回想録について

一方、中国にも旧満洲国外務省関係者は、当然いるはずなのだが、これまで回想録などは知られていなかった。ところが、『外交部同人会記録集：あしあと追録』が送られてくるようになってほどなく、中国はハルビンに出張した際に、王替夫口述、金淑梅整理、『偽満外交官的回憶／黒龍江文史資料第25輯／』（哈爾濱：黒龍江人民出版社、1988年）をみつけた。以下、同書にもとづき、同氏のプロフィールを御紹介するが、人名の誤りなどの間違えは、前記『外交部同人会記録集：あしあと』所載の名簿で適宜、補注を入れた。

王氏は、1910年、吉林省永吉県黒山嘴子屯のうまれ。18歳で東省特別区法政大学へ入学。満洲事変勃発後、馬占山慰問団に参加。そのため日本軍に逮捕され入獄する。そして釈放されたところに、青木という名の日本人が現れ、やがてその勧めにより「満洲国外交部駐哈爾濱外交特派員公署【正確には、北満特派員公署】」による「外交雇員」募集に受験する。最初の試験課目は、中文作文で駐ハルビン外交特派員公署からハルビン駐在ソヴィエト総領事館宛抗議の「照会」を書かされた。つぎにロシア語会話のテスト、最後に施履本特派員、杉原千畝副特派員による日本語の面接があった。これに合格すると、杉原にともなわれ首都新京へ赴き、外交部大橋忠一次長と面談した。大橋は、王の成績が突出しており、外見が外交官にふさわしいといったが、「ロシア語ができるから、ソ連に通じているのではないか」と聞く、王は「わたくしは日本語もできる。では日本にも通じているか」と応酬し笑いとなった。

王はチタに開設される領事館に送られることになったが、領事の李垣は北京大学でロシア語を修めた人物で、外交部大臣謝介石との縁故で入省したという。出発まえに送別会が開かれ、外交部の科長以上が集まったが、日系・満系あわせ4、50人いた。1932年12月下旬、チタへ向け出発したが、一行は12人。李領事と夫人、息子とコック、副領事山田七郎、書記官鄧福山と長谷川、雇員北島清次と王、さらにふたりのボーイと運転手窪田正治である。職務分担は、領事が館務と対外交渉を総覧し、副領事が館務、日系書記官が財務、電報、機密文書、満系書記官が対外交渉、王は館内雑務を担当したという。【山田七郎とあるのは山本七郎の誤り。また鄧福山は、鄧松山の誤記。長谷川は長谷川濬で、有名な長谷川兄弟の三男。長兄は林不忘、末弟

に長谷川四郎がいる】

当時のチタには 1 万人以上の中国僑民がおり、また南京政府の領事館もあった。王は、チタ領事館内の複雑な人間模様と領事生活についてふれるが、領事館設置の主要目的は、僑民保護と諜報にあった。やがて着任した副領事津田【豊】は関東軍少佐で、ソ連軍事情報を収集していた。ついで 36 年 9 月、大連の外交辦事処に異動、当時、大連郊外に居住していたグレゴリー・セミョーノフのことについてもしるす。【大連に駐在したのは事実であろうが、外交辦事処という名称のオフィスがあったかは不明。名簿上の官職は外交部通商司属官、ついで外務局長官官房属官】そしてチタ在勤中の業務成績が評価され、満洲国がはじめてヨーロッパに設置する【正確には駐イタリア公使館の方がさきに開設された模様】、在ベルリン公使館書記官【官職は、理事官補】に任命された。同時に発令されたのは、公使呂宜文、参事官江原綱一、書記官伊吹幸隆【おそらくは誤解、伊吹は康德 7 年の名簿に理事官として名があげられている】、主事笠井【唯計】、そして劉茂才であった。そして 38 年 9 月、新京駅で張景惠國務総理らに見送られ出発、日本経由で 11 月、ベルリンに到着した。翌 39 年 2 月、呂公使は信任状を奉呈するが、王も同行 3 人のなかに選ばれ、ヒットラーに拝謁している。やがて午餐のときに、ヒットラーを間近にみるが、「尋常のひとにない眼光」を印象としてしるしている。

ドイツに駐在はしていたものの、満洲国の置かれた微妙な状況もあり、そして第二次世界大戦がはじまり、さしたる大きな仕事はなかったようだ。ただ 1939 年の春から 40 年 5 月末までに、ユダヤ人約 12000 人にヴィザを発給したと書いている。44 年夏、戦況はドイツの敗色が濃くなり、在欧一部館員の帰国が決まった。王、根沢【二郎】主事、イタリア公使羅振邦、スペイン駐在代理公使松田【松村寛の誤りとおもわれる】、それに満鉄ベルリン駐在囑託窪田の 5 人は、44 年 7 月 20 日、ベルリンを発ちアンカラへ赴き、そこからソ連のバクー経由でシベリアを回り、9 月 30 日にハルビンに着いた。そして 10 月 5 日には、皇帝溥儀に拝謁、半年の特別休暇ののち、45 年 5 月に國務院総務庁参事官に就任した。

やがて日本の敗北、満洲国崩壊を迎えるが、王はソ連軍占領直後の張景恵とソ連軍司令官会見の通訳をつとめている。9 月 3 日、まず旧満洲国の高官 30 名ほどがチタに連行され、さらに簡任官以上もソ連に送られることになったが、王は残されソ連軍、ついで進駐してきた国民党との連絡に当たる。しかし 11 月 3 日、逮捕されソ連に送られ抑留され、1956 年 3 月、中国へ帰国した。

以上が、王替夫回想録の概略である。比較的淡々と事実を書いており、こ

の種の“文史資料”によくみられる、「日本帝国主義」への過度な非難は少なく、また満洲国の「満系」同僚に対してはなんら批判・暴露の言をのべていない。ベルリンで4ヶ月、王宅に滞在したこともある古海忠之については、古海が戦後は中国に抑留され“反省”したこともあるが、「最高の友」と書き、また王の外交官としての適性を見抜いた大橋忠一に対しては好意的な筆致でふれている。ただ現存する名簿と対照すると、実際に王がいたポジションよりもやや上位にいたかのような書き方もみられ、さらに45年5月の国務院総務庁参事官就任は確認できない。王が満洲国崩壊後、すぐには逮捕されなかったのは、ソ連側が王の通訳としての能力を当面は必要としていたからと考えられるが、簡任官級へ昇進していたかは不明。

さて本(2002)年、中国へ出張した折、書店において、王替夫口述、楊明生執筆、『見過希特勒与救過猶太人的偽滿外交官』(哈爾濱：黒龍江人民出版社、2001年)なる本をみつけた。これは、王の口述をもとに、小説仕立てにしたものであるが、内容的には前掲『偽滿外交官的回憶』とほとんど変わらない。ただ冒頭に王自身の「声明」が載せられている。そこには、「わたくしの30～40年代における外交官生活を紹介した出版物をみると、残念ながら幾つかの誇大事実や根拠のない憶測がみうけられます。これはインタビューをうけた初志に反するばかりか、ひとびとに歴史的事実への誤解を生じさせる可能性があります。とくに以下のことを申しあげたい」とあり、①一部の出版物に「ヒットラーと十数回会見した」とあるのは間違えで、話したのは国書奉呈時の招宴だけ、②満洲国公使館は、満洲国政府が送った外交使節であり、ナチ党とは「工作関係」はなく、ヒムラーなどともほとんど接触はなかった、③39年春から40年5月にかけて、ドイツのユダヤ人にヴィザを発給したのは、わたくしの自発的行為ではなく、領事業務にのっとただけ。発給数は、1万から1万2千人のあいだで、とても「3万」などには及ばない、そのほか、溥儀への謁見の日時や戦後のことにもふれている。

想像するに、“シンドラーのリスト”や、おそらく日本、米国での杉原千畝再評価の影響が中国にも及び、王氏のところにも、ジャーナリズムのインタビューがあり、記事のなかには、ヒットラーに何度も会ったとか、ナチ党と関係があったとか、自分の判断で3万人のユダヤ人にヴィザを発給したなどの、事実無根のことが書かれていたのであろう。王氏は本書が自分の口述にもとづき、校閲もしているので、本書の記述をよりどころとしてほしいとしているが、前著の誤解を引き継ぎ、さらに間違えを重ねたところもみうけられる。たとえば、当該書63頁、ドイツ駐在公使館に発令された人物について、呂宜文公使のほか、「三源綱一を参事官、王替夫、伊吹幸隆を書記官、劉茂林、笠井豪を主事に任命した。これらの官員は満洲帝国がヨーロッパに

駐在させる最初の外交官であった」とするすが、前著では参事官の名前を「江原綱一」と正しくしてはいたが、本書では「三源綱一」と誤記し、書記官について王と伊吹とするが、すでに指摘したように、伊吹についてはおそらく記憶違い、王は「理事官補」が官職であるが、これを「書記官」とするのはかならずしも間違えとはいえないかもしれない。「主事」には、「劉茂林、笠井豪」が任命されたと本書はするが、これも劉茂才、笠井唯計が正しく、しかも「高等官試補」である。また在欧最初の満洲国外交官とするのも誤り。

ともあれ、王氏の「声明文」の日付は 2000 年 6 月 13 日となっており、この時点ではお元気であったようで、御長命をお祈りしたい。

5. 北朝鮮で粛清された満洲国外交官、朴錫胤について

さて、ここ数年の満洲国外交部同人会同人の主要な関心のひとつは、杉原千畝のここのようだ。杉原は満洲国の外交部にも勤務しており、同人のなかに杉原と親しい関係にあった方も多い。そして、Hillel Levine, *In Search of Sugihara: The Elusive Japanese Diplomat Who Risked His Life to Rescue 10,000 Jews from the Holocaust* (New York: Free Press, 1996) [日本語訳は、ヒレル・レビン著、諏訪澄・篠輝久監修・訳『千畝：一万人の命を救った外交官、杉原千畝の謎』（清水書院、1998 年）]に対する批判が述べられている。わたくしは、同書をそれなりに興味ふかく読んだ、とくに杉原の前夫人をさがしだしたことなどは、著者の努力による賜物であろうが、同時にかなり強引な取材をしたらしい。

そして会誌『あしあと追録』の記事から、石黒健治『サキエル氏のパスポート—愛と幻の満州国へ』（光人社、2001 年）という本がだされることを知った。はたして本書が、近現代東北アジア地域史研究会会員諸氏のあいだで、どの程度、知られているかわからないが、著者、石黒氏はプロの写真家であり、ニューヨーク在住のポーランド出身ユダヤ系米国人のもとに遺された満洲国発行のパスポートを手がかりに、いわば第二、第三の杉原千畝を探し、そして満洲国がユダヤ人に差し伸べた好意に隠された、真の意図をとらえようとするドキュメンタリーである。当然のことながら、取材のなかで、外交部同人会諸氏も多数登場している。

この本をよんで関心をひいたのは、朴錫胤という人物についてである。同書に引かれている 1940 年発行『満洲紳士録第二版』に掲載された、朴の項目をそのまま紹介すると、当時の現職は満洲国駐ワルシャワ総領事。明治 31

年10月の生まれ。本籍は京城市鐘路。学歴は、大正11年、東大法学部卒。昭和3年、英国・ケンブリッジ大学政治科卒。経歴は、東大法学部副手、朝鮮総督府在外研究員、京城毎日申報副社長、国際連盟帝国随員等をへて、康德元年12月外交部嘱託兼國務院總務庁嘱託、ついで民生振興會議委員、外務局調査処長等歴任、康德6年現職就任。官位は簡任二等とある。

この種の“紳士録”の通例として、「学歴」と「職歴」が分離されているが、おそらくは、1922年に東大法学部を卒業したあと、法学部副手となり、朝鮮総督府在外研究員に任命され英国へ渡り、1928年にケンブリッジ大学を修了し、京城毎日申報副社長に就任、という順番になろう。驚くべきは、その高度な学歴である。当時の日本内地出身者と比較しても、超エリートといつてよい。しかも朴は22年に東大法学部をでているが、日本が朝鮮を植民地化したのが1910年であることを考慮すると、20年代初頭では東大法学部に進学する朝鮮人学生はまだ、さほど多いとはおもわれない。さらに無給ではあったが副手になることは、“秀才”の部類に入る卒業生であろうし、研究者への途を進もうとしていたと考えられる。朝鮮総督府在外研究員は、朝鮮総督府が将来を約束した、トップ・エリートの在外研修のために設けた制度であろうが、京城帝国大学、そして台北帝国大学は大学令により設置されてはいたが、監督権は文部大臣ではなく、それぞれの総督に与えられていた。教員も総督府の文官という立場であつて、在外研究へでる場合も、文部省在外研究員ではなく、総督府在外研究員であつたことを念頭に入ると（たとえば、台北帝国大学の神田喜一郎助教授は、台湾総督府在外研究員としてヨーロッパに留学している）、おそらくは、朝鮮総督府側は、24年に開設される京城帝国大学のスタッフ候補者として朴を送ったと推測できる。

ところが、帰国後、朴はそのような途をとらず、朝鮮総督府の御用新聞といわれた、京城毎日申報副社長に就任。さらに国際連盟日本代表の随員をへて、満洲国に移り、満洲国のワルシャワ駐在総領事となった。石黒氏があきらかにしているように、朴は石原莞爾の信奉者でもあつた。朴の行動様式と満洲国崩壊以降の消息については、文中で笠井唯計氏が「挙動がなかなか疑問の人でね。彼の行動はまったく分からなかった。いつもいきなり現れてね、社交上手で、会うなり“やあやあ”と握手してね。……戦争に負けて、それからどうしたかという、北朝鮮へ行ったとか、肅正されたとかあとで聞きましたよ、外交部の方で」（112頁）と語っている。エピローグで、石黒氏は「複数の人が北朝鮮へ行ったのではないかとはいいますが、証拠はありません」（358頁）とのべている。

この本を読んで、朴錫胤のことがいささか気になったので、朝鮮近代史が御専門の永島広紀佐賀大学助教授に、朴について言及した文献はないか、お

尋ねた。永島氏からは、さっそく2件の論文を御紹介いただいた。御教示に感謝する。それは、水野直樹「在満朝鮮人親日団体民生団について」、河合和男ほか編『論集朝鮮近現代史—姜在彦先生稀記念論文集』（明石書店、1996年）、329—361頁、および松田利彦「東亜連盟論における朝鮮問題認識」『（世界人権問題研究センター）研究紀要』第1号（1996年1月）である〔ただし松田論文については、筆者は遺憾ながら未見〕。

以下、前記水野氏論文に依拠しながら、朴錫胤のプロフィールを追うと、1898年うまれ、本籍については諸説あるが、全羅南道からのちに京城へ籍を移したようだ。1911年に東京へ留学、成城中学をへて東京帝国大学法学部に入学。弟や親族も東京に留学していること、また私立の中学に入っていることからみて、水野氏が指摘するように「かなり裕福な一族」とおもわれる。1910年代後半は、東京で朝鮮人学生の運動が活発であったが、朴は朝鮮の独立を主張する「硬派」のなかの「斬進派」に属した。朴は野球選手としても有名であったが、このことは前記笠井もふれている（石黒、前掲書、112頁）。東京留学中に知りあい結婚した夫人は、崔南善の妹である。22年に東大を卒業したが、前掲『紳士録』にあるような東大副手ではなく、ソウルで新聞記者をしていたらしい。

朴は24年に朝鮮総督府在外研究員として、国際法研究のためケンブリッジ大学に留学、28年に帰国する。水野氏は、論文発表当時、まだ刊行されていなかった吉野作造日記から、朴が吉野に対し「明日【朝鮮へ】帰国、京城大学の助教授になる」（現在は刊行され、『吉野作造選集 15（日記三）』（岩波書店、1996年）、63頁）と語っていたことを紹介している。まさに、わたくしの予測どおりであった。ただ、朴の期待に反して、京城帝国大学助教授に就任することはなかった。もっとも同大学の場合、のちの1942年時点においてさえ、学部教授に朝鮮人はまったくおらず、助教授でも医学部に現職1名、退職2名。予科に教授1名という程度（泉靖一「旧植民地帝国大学考」『泉靖一著作集 6』〔読売新聞社、1973年〕、273頁）であった。結局、東亜日報をへて、30年に総督府の御用朝鮮語新聞、毎日申報の副社長に就任した。この時期の朴の活動でもっともよく知られているのが、水野氏が当該論文の主題とする、「在満朝鮮人親日団体」である「民生団」の組織である。

32年には、ジュネーブ一般軍縮会議日本代表団随行員となり、ここで石原莞爾と親交をむすび、「その東亜連盟論に共鳴した朝鮮人の一人」となる。石原にとっても、このころが、その生涯における最絶頂期であり、満洲国に対する影響力もおおきかった。朴も活動の舞台を、新生満洲国にもとめ、「満洲国官吏として最も高い地位に就いた朝鮮人の一人として活躍」した。34

年 12 月には、外交部嘱託兼國務院總務庁嘱託、ついで民生振興會議委員、外務局調査処長をへて、39 年 2 月ワルシャワ駐在総領事となるものの、同年 9 月のナチス・ドイツのポーランド侵攻により、ポーランドが解体されると、40 年 8 月、ドイツ、ソ連を経由して日本へ戻る。

なお水野氏は、調査処長のあと、37 年に北京駐在大使館勤務としているが、これは誤記とおもわれる。前掲『あしあと』所載名簿に、朴の名がはじめて掲載されるのは、康德 5 年版で、このとき職位は、外務局調査処長であり、官位は「簡二・五」である。「処長」というポストは、比較的軽位の印象をうけるが、当時の外務局機構は、首都新京に長官と長官官房、調査処と政務処 2 処があり、ハルビンに駐哈爾濱外務局特派員公署、そして在外公館からなる。官位からみても、満洲国内にいる外務局幹部のなかでは、長官蔡運升、政務処長亀山一二、駐哈爾濱外務局特派員の下村信貞につぐ、第四位。ついで康德 6 年版ではワルシャワ総領事となっている。満洲国が中華民国を承認するのは、1940 年のことで、これよりまえ、駐在中華民国通商代表部が北京と上海に置かれたが、大使館（事務所は、北京、南京の 2 ヶ所）が設置されたのは 41 年のようで、したがって 37 年に「北京駐在大使館」へ勤務することはありえない。ポーランドより帰国後の処遇に関しては、康德 9（1942）年版名簿では、大臣官房参事官兼總務庁参事官、官位は「簡一」であり、「特任」の大臣、公使を別にすれば、外交部本部内でも、次長三浦武美、政務司長下村信貞と並ぶ。

満洲国帰国後の朴の動静に関して、協和会中央委員をつとめ、日本の敗戦が近づくころ、満洲国から朝鮮に帰り、「呂運亨らによって密かに組織されていた建国同盟に関わった」らしいが、45 年 8 月 15 日前後からは、朝鮮総督府、朝鮮軍と、呂らの建国準備委員会との交渉に委員として参加した、と水野氏は指摘する。その後の活動は不明だが、最後の消息については、朝鮮戦争中に北朝鮮に連行されたとする説と、『金日成回顧録』が書くように、解放直後、変名で平安南道に隠れていたところを捕まったという、ふたつの説があるようだ。水野氏は、「朝鮮戦争以前ないし戦争中に“民族反逆者”として北朝鮮で処刑された」と推定するが、その生涯について、「植民地期の朝鮮において最高のエリートであり、日本留学中は“漸進派”の民族主義者、理想主義者であった朴錫胤は、帰国してからは植民地支配体制の側に身を寄せることとなり、民生団の結成を経て、満洲国官僚として栄達の道を歩み、解放後は“民族反逆者”として処刑されるにいたった。悲劇的な生涯であったといえる」とむすぶ。

おもえば、朴錫胤がえた学歴は、当時の帝国日本の範囲内では、日本人、朝鮮人を問わず、最高レベルの水準であった。しかしその学識を積極的に

生かす機会があったとすれば、おそらくはジュネーブ国際会議出張のときと、満洲国外交部勤務時代、しかも傀儡国家である満洲国の限られた「外交」活動からみれば、わずかにワルシャワ駐在時期に限定されるであろう。さらにワルシャワに赴任したものの、ナチス・ドイツの侵攻によって、その駐在時間はきわめて短い時間となった。そして、そこに救いをもとめるユダヤ人がすがってきた。母国を喪失した経験を持ち、青年時代には理想主義に傾倒した朴が、満洲国の方針に反しない限りにおいて、ユダヤ人へ積極的に対応したとしても不思議ではない。

朴が満洲国に活動の場を移した理由については、リアリスティックな解釈が可能である。満洲国が成立する時点までに、日本国内には、官僚、軍部、学界、産業界すべてに強固なヒエラルキーがすでに形成されていた。その体制より疎外された、ないしは主流派たりえない、野心的なものにとって、あらたに樹立された擬制国家、満洲国は飛躍の可能性とそのための活動への舞台をあたえた。しばしば指摘されることであるが、日本国内中央省庁の高級官僚への地位を約束されたポストは、帝国大学、官立大学卒業生により、ほぼ独占されていた。したがって、私立大学、高等専門学校卒業生は、むしろ満洲国政府に入ることによって栄達の途をめざした。ちなみに、このような傾向は、形をかえて、いまなお日本の官庁ではつづいている。たとえば中央省庁では、原則としてノン・キャリアは課長職には就けない。しかし中央省庁をでれば、財務省の場合は地方財務局、文部科学省であれば国立大学、外務省ならば外郭団体に行くと、有能なノン・キャリアならば課長になれるのである。

満洲国を支配・指導していた関東軍が、あえて三井・三菱に代表される旧大財閥を排除して、鮎川義介に率いられる日産に満洲国移転を促したのも、おなじような考慮からであろう。数年まえに、ハワイ大学のジョン・ステファン教授にお会いしたとき、満洲国で活動した日本人のなかに、沖縄やハワイ出身者が多いことをとりあげ、その軌跡を追っておられた。その研究が、どのようにまとまりつつあるかは知らない。だが、この問題にも、おなじ状況が反映しているだろう。おそらく朴錫胤が満洲国政府に入った理由は、朝鮮内には、みずからの学歴とキャリアを生かす場とポストがなかったからにちがいない。石原莞爾との出会い、その東亜連盟論への傾倒も、その誘因となったであろう。しかし、国際情勢にもあかぬ朴は、満洲国に末日が訪れるまえに、朝鮮へ帰還して、つぎなる途を模索した。だが、それは成就することはなかった。

6. 満洲国へ行った台湾人たち

満洲国の初代外交部総長で、日本大使もつとめた謝介石は、台湾・新竹のうまれである。このことを知ったのは、いまを去ること四半世紀まえの台湾でのこと、当時、わたくしは中央研究院近代史研究所において外交文書を調査していたが、夜、宿舎でなにげなくテレビの歴史ドキュメンタリーのような番組をみていることである。翌日、現地の某友人学者に、このことを話し、だれか謝介石の生涯について研究している方はいないかと聞いたところ、そのような人物をとりあげすることは、ここではタブーだといわれた。もとより、そのころの、国民党が支配する、戒厳令下の台湾には、張学良をはじめ中国東北から逃れてきたひとが多くおり、同郷雑誌や回顧録、さらに中国東北についての研究もでていた。しかし満洲国に関与した台湾人—といっても、ここでは最近、流行の台湾アイデンティティ云々という問題とは関係なく、清朝時代ないしは日本統治下の台湾にうまれたひと、という意味で—という問題は、やはり忌避されるテーマであったのである。

それから幾星霜をへて、台湾は経済成長と民主化をとげ、台湾の台湾化も進んだ。こうした状況のもとで、許雪姬氏（中央研究院近代史研究所）をリーダーとする“オーラル・ヒストリー”（「口述歴史」）プロジェクトのなかで、満洲国に行った台湾人がとりあげられることになった。ちなみに日本でも、“オーラル・ヒストリー”は近年、注目をあび、政策研究大学院大学のなかに、中核的研究拠点（C. O. E.）形成プロジェクトとして、「オーラルヒストリー政策研究プロジェクト」が設置され、活発な活動をおこなっているが、こと“オーラル・ヒストリー”に対する関心と実績においては、日本より台湾の方が、はるかに先んじていることに注目しなければなるまい。“オーラル・ヒストリー”なるもの自体、米国で発達した研究手法であろうが、日本より早くそれが受容された。

そもそも、近代史研究所における「口述歴史」プロジェクトは、1959年、つまり研究所の「籌備時期」に、やがて初代所長となる郭廷以博士を中心に開始され、72年までに70余人へのインタビューがおこなわれた。郭博士および近代史研究所と当時のコロンビア大学との密接な関係をおもえば、当然、同大学“オーラル・ヒストリー”プロジェクトからの影響と示唆があったと考えられる。そして82年から、当事者の了解をえて、出版が開始され、さらに84年には「口述歴史組」が研究所に組織され、ふたたび訪問インタビューがおこなわれるようになった。

許女史がこのようなテーマを取りあげるに至ったきっかけは、二・二八事件に関する“オーラル・ヒストリー”収集の過程で、何人かの満洲国建国大

学卒業生について知ったことにあるという。事業は 1992 年に開始されたが、いまのところ公表された、満洲国関係台湾人の“オーラル・ヒストリー”は、具体的には以下のとおりである、対象となった方の略歴（ただし、卒業学校名、職位などは、すべて編者による記述による）も摘記すると、

- A. 『口述歴史』第 5 期〔日據時期台湾人赴大陸経験〕、民国 83〔1994〕年 6 月、中央研究院近代史研究所。当該号には、第一部 16 編、第二部 3 編（いずれも「二・二八事件」を中心とした台湾関係）を収録。満洲国関係は以下の 10 編。

呉左金：満洲国駐新義州副領事、済南総領事。戦後、297 日間投獄されたのち、台湾に戻る。

呉金川：満洲国中央銀行に勤務、戦後、張璈嘉の東北接收工作に協力。

蔡西坤：満洲国警務処、文教科、動員科などに「光復」まで勤務。

謝 報：満洲国錦州省実業庁、奉天省経済庁科長等の職を務める。

林鳳麟：「満洲国」憲法、民事法の編纂工作に関与。

黄洪瓊音(女性)：夫である黄子正は、溥儀の「御醫」。溥儀とともにソ連に抑留、現地で死亡。

陳許碧梧(女性)：夫である陳錫卿は、満洲国文教局局長や周佛海の秘書を務めた。

盧昆山、李謹慎夫妻：満洲で医学を学び、開業。

梁許春菊(女性)：夫である梁炳元は、満洲で開業。このため、梁許女史もソヴィエト軍進駐の際、危機を体験。

梁金蘭(女性)、梁育明：姉弟の父、梁宰亦は、東北へ行って開業した多くの台湾「醫生」のひとり。撫順の天生医院院長であったが、「光復」後、現地で亡くなる。

- B. 『口述歴史』第 6 期〔日據時期台湾人赴大陸経験〕、民国 84〔1995〕年 7 月、中央研究院近代史研究所。当該号には、当初、13 編を収録する予定であったが、建国大学卒業生である、李中清氏など 3 氏は、「個人的な考慮により、しばらくは公開を希望しない」こととなった。また 1 編は、日本の群馬大学所沢潤氏の「経験談：我的訪談主題及経験」であるので、実質的には 9 編を収める。内、満洲国関係は以下の 2 編。

黄順記：満洲医科大学卒業。まず奉天赤十字病院に勤務，ついで開原に博愛医院を設立。三番目の弟【とあるが二番目の弟の誤りとおもわれる】を除いて，一家のほとんどが「大陸経験」をもつ。黄順記はまた満洲で二百余甲の土地を購入，農場を開いたが，日本の敗北でこれら事業は烏有に帰した。

呉憲蔵：台中師範学校在学中に満洲建国大学を受験，1942年に入学。45年，日本の敗色が濃くなり，日本国籍の学生が召集されると，幾多の経過をへて台湾に戻る。

C. 訪問：許雪姬，記録：許雪姬，鄭鳳凰，王美雪，蔡說麗『日治時期在「満洲」的台湾人』[口述歴史叢書 79]，中央研究院近代史研究所，民国 91 [2002] 年。前掲 A・B は，いずれも近代史研究所発行の雑誌『口述歴史』に掲載されたものであるが，本書は満洲国関係者 27 編の“オーラル・ヒストリー”を 1 冊にまとめたもの。

施義徳（1916～2000）：鹿港人。1931年，満洲医科大学預科に入学。42年卒業。のち母校附属病院小児科の医師。43年に台湾へ戻る。東北には前後 12 年いた。

劉建止：1916年，台中県新社にうまれる。36年，満洲医科大学専門部に入学。母校附属病院松井外科で 2 年勤務ののち，妻である謝久子と病院を開業，3 年後，48 年に台湾へ戻る。東北には前後 12 年いた。

余錫乾：1917 年うまれ。台北泰山人。36 年に東北に到り，42 年，新京医科大学卒業。満洲電信電話会社附属病院で内科医を務め，46 年に台湾へ戻る。東北には前後 10 年いた。

葉鳴岡：1922 年うまれ。花蓮人。1941 年，新京医科大学入学。44 年卒業後，熱河の北票病院に勤務。戦後，岳父である袁樹泉の錦昌医院で医師を務め，48 年に台湾へ戻る。東北には前後 7 年いた。

李晏（1896～1967）：【本人は死亡しているので，甥である李定山が李晏について語る】彰化人。1919 年，台湾総督府医専 18 期卒業。21 年，日本の北里研究所に入り，細菌研究をおこなう。24 年，東北地方に伝染病が発生すると，関東庁の招聘で臨時防疫部の医師となる。その後，短期間，東京に戻り『東亜医学雑誌』を経営。ついでハルビンの防疫研究所細菌部長ののち，満洲里医院院長に抜擢される。東北に 3 年，生活するあいだに張作霖と面

識をえた。院長のまま、パリ大学熱帯病院、パスツール研究所に派遣され、細菌学を研究。

侯金魚（女性）：1914 年うまれ。台南人。長栄女学校卒業。父親、侯基は台南の大きな綿布商。岡山人の医師、石林玉燦と結婚。かれは、東京医科大学の第一回卒業生で、36 年、満鉄ハルビン病院に勤務。のちに阿城、窯門、山溝での医師をへて、同窓生張家林とともに鞍山で開業、のち吉林に移り、46 年に台湾へ戻る。東北には前後 10 年いた。

翁通逢：1910 年うまれ。嘉義人。東京の東洋医学院卒業。44 年、東北に行き、四平で楊毓奇の開設した医院に勤務。ついで新京医科大学郭松根教授の助手となる。46 年に台湾へ戻る。東北には前後 2 年いた。

葉彩屏（女性）：1920 年うまれ。雲林人。彰化女子中学卒業。42 年、彰化人の医師、劉萬と結婚。劉萬は 40 年、満洲医科大学を卒業、母校附属病院皮膚科で 1 年間、研究。ついで大連で仁生医院を開業。48 年に台湾へ戻る。劉萬は東北には前後 15 年いた。

林黄淑麗（女性）：1914 年うまれ。嘉義人。44 年、昭和薬専卒業。同校一年のとき、同郷で日本大学医科に在学中の林錦文と結婚。45 年林錦文は卒業するが、日本は危険なので、開拓団に参加して吉林の農場に行く。ついで新京にでて、新京工科大学教授であった叔父、黄春木のもとに身をよせる。戦後、林錦木は新京赤十字病院勤務。46 年に台湾へ戻る。東北には約 1 年ばかりいた。

何金生：1912 年うまれ。早稲田第一高等学院卒業。38 年、瀋陽私立維城国民高等学校日本語教員。43 年、東京に戻り、早稲田大学文学部東洋哲学科に学ぶものの、戦争のため、久しからずして大学等は休校となり、同年、瀋陽啓明学園に就職。44 年に再び維城中学で副校長に任ぜられる。戦後は瀋陽市台湾同郷会総幹事。46 年に台湾へ戻る。東北には前後 8 年いた。

陳登財：1909 年うまれ。台北人。台北工業学校卒業。40 年、林煥星学長の「鼓励」で新京工業大学化学工学科助手に就職。林煥星は当時、同大学助教授であった。陳が東北に行った主要な目的は、勉強を続けようと考えたからで、国立建国大学受験をめざした。ところが、この年、技術者の人員確保のため、進学禁止令がで、また建国大学はかなり難関のため、満洲には 1 年ほどいて台湾へ戻る。

徐水徳：1905 年うまれ。桃園人。32 年、大阪市立商科大学金融科卒業。32

年、東北に行き、翌年、満洲国財政部商務司に入り調査科長。34年、大同学院卒。45年までに、經濟部参事官薦任二等。46年に台湾へ戻る。【なお、45年8月9日から12月31日までの氏の「光復日記」があり、付録として掲載されている。】

黄陳波雲（女性）：静修女子中学卒業。のち台北儲蓄銀行に入行。40年、黄清塗と結婚。黄清塗は、基隆人で明治大学卒業。かれは北京で就職、結婚後、東北に行き、翌年、満洲国駐在汪政権中華民国通商代表部高等官試補、大使館試補、45年薦任二等に叙せられる。46年に台湾に戻る。満洲には前後5年いた。

陳亭卿：【夫人に対するインタビュー】1914年うまれ。台中人。35年法商学院経済系卒業。同年、洪月桂と結婚。恩師の佐藤佐の推薦によって、東北へ行き、36年、大同学院に入学。同時に「満洲語」二等試験に合格。民生部文教司に勤務ののち、經濟部事務官に転ず。46年に台湾へ戻る。東北には前後11年いた。

洪在明：1915年うまれ。35年、台北工業学校卒業。その長兄、次兄も東北で就職しており、国務院営繕需品局機械科に就職。翌年、台湾へ戻る。台湾に1年5ヶ月いたのち、再び東北へ赴き、前後2年いた。洪氏兄弟9人中、6人は東北経験がある。

李謀華：1920年うまれ。雲林人。40年、新京工科大学入学。同大学は国立のため、学費は免除。ただし卒業後4年半は、かならず仕事につかねばならなかった。卒業後、建築技士の試験に合格。国務院建築局設備科で働き、44年に台湾へ戻る。東北には前後4年いた。

林永倉：1921年うまれ。基隆瑞芳人。39年、国立新京工業大学入学。42年、卒業時には、民生部大臣賞を受賞し、同時に高等技術官選考試験にも合格。大同学院で1年研修。修了後、交通部土木総局牡丹江工程処に就職して、河東橋建設工事にソ連軍の東北進入まで従事。46年に台湾へ戻る。東北に前後7年いた。

林更味（女性）：1912年うまれ。台中人。33年、豊原の張世城と結婚。張世城は、姉の夫である袁錦昌が新京で錦昌医院を開業したため、東北に行く。財政部権運署に入り、やがて張家湾、撫順に転勤。再び新京に戻るが、東北の寒冷な気候に不適応なことから、新京工科大学林朝榮教授の勧めもあって、41年に北京へ転居。戦後、台湾へ戻る。東北には前後8年いた。

許文華：1931年うまれ。台南人。33年に父親である許鶴年に従い東北に行く。母の二番目の兄弟、楊燧人が大連で「醫生勧誘所」を開

いたからで、許鶴年も試験をうけて、専売署に入りアヘンの取締り事業に従事した。長春は非常に寒いので、37年、大連の満洲繊維聯合会に就職。39年、安東で協和染廠を創立、事業はきわめて成功した。許文華は、大和小学校、安東中学で学び、戦後、47年に台湾へ戻る。東北には前後16年いた。インタビュー訪問者のなかでは、もっとも長く、またこの期間、一度も台湾へは戻っていない。

李訓忠：1921年うまれ。台北人。40年、台北工業学校応用化学科卒業。台北帝国大学農業化学科に入り、「実習醫生」となる。東北で仕事の機会があったので、陳登財、陳顯義ら三人の校友とともに、東北へ行き、李は大陸科学院に就職して、稀有金属が飛行機の機材となりうるかどうかの分析、あるいは毒ガスが人体にあたえる影響の測定をおこなった。気候が寒く、体によくないので、42年に台湾へ戻る。東北には1年ばかりいた。

楊藏嶽：1917年うまれ。台南県人。39年、台南高等工業学校応用化学科卒業。台湾では就職が難しいため（差別待遇のゆえ）、ついに日本の福岡で満洲国の試験をうけ、採用後、39年、東北に行く。大陸科学院電気化学研究室に就職し、委任官試補から委任官へ昇進する。戦後、46年に台湾へ戻る。東北には前後7年いた。

翁通楹：1920年うまれ。嘉義人。42年、京都帝国大学工科に入学。3年間のはずであったが、戦争のため半年はやく、繰りあげとなり、44年9月、卒業。戦況が急迫し、台湾へ戻る海路が危険のため、そして弟、翁通逢が満洲にいたこともあって、鶴岡炭鉱の採用をうけ、東北へ行く。短期間、鶴岡炭鉱で働いたのち、大陸科学院航空研究室に移り、航空機が飛行中にどのようにして結氷作用の影響をうけずに免れるかを研究した。新京の工業大学でも材料力学を教えた。46年に台湾へ戻る。東北には前後2年いた。

陳永祥：台南県人。36年、台南高等工業学校卒業。卒業後、福岡で満洲電信電話会社の試験をうけ、採用後、すぐに東北へ出発、同会社の技術部市外課に勤務、長距離電話技術に通じる。まず新京に1年、ついで奉天に転じ1年、鳳凰城、草河口機務站到2年。戦後、同窓の林有丁とともに、国民政府に留用された。命をうけて軍隊の保護下で四平市の電話の修復をおこなったが、47年に四平は陥落。広東に派遣されそうになったが、まず台湾に戻るべきことを主張、48年に台湾へ戻る。東北に前後13年いた。

陳嘉樹・陳高紘夫妻，陳正徳：陳嘉樹は，1919 年うまれ。台南人。広島高等工業学校機械科卒業。台湾では自分にあう仕事がなかったので，福岡で満洲国の試験をうけ，35 年に満洲へ渡り，産業調査局で働く。同年，陳高紘と結婚。陳高紘は，1914 年うまれ。彰化高女卒業。陳嘉樹は，その後，吉林の満洲電気化学会社に転じ，調査股長，企画股長を務める。日本の敗戦後，吉林から新京に逃れ，46 年に台湾へ戻る。東北に前後 11 年いた。子息，陳正徳は台湾に帰ったときは，約 10 歳。

傅慶騰：【本編はインタビューではなくて，傅慶騰が日本語で書いた文章の翻訳】1912 年うまれ。台南高等工業学校卒業。34 年 2 月，8 人の同窓生とともに，恩師の引率のもと，南満洲電気株式会社を受験し，かれひとりが採用された。34 年に大連本社に行き，まず甘井子火力発電建設事務所監督。35 年にはハルビン市馬家溝火力発電所の増設工事に従事，さらに新京の総公司に移る。44 年下半年に渾河発電所の未施行発電機を阜新発電所付近に疎開させたが，すぐに日本の敗戦となる。集団自決の脅しや，ロシア人との談判での苦痛の体験をへて，ロシア人の脅迫のもと，阜新発電所機器を外しソ連へ送った。46 年に台湾へ戻る。東北に前後 12 年いた。

許長卿：1924 年うまれ。台北人。日本の法政大学政治経済系在学中に東京大空襲にあい，友人王朋友の協助のもと，45 年に東北へ行く。瀋陽で台湾人，李清漂の開いた日新鉄工廠で半年働き，日本の敗戦を迎えた。46 年はじめ，北京に行き，朝陽大学に学び，49 年に台湾へ戻る。東北におよそ 1 年いた。

はじめにふれた謝介石をあげるまでもなく，満洲国には多くの台湾出身者がいたことが知られている。ただし，従来その状況は具体的に検討されることはなかった。この許雪姬女史を責任者とするプロジェクトによって，その一端があきらかになった。御努力に敬意を表す次第である。ただし，これらの“オーラル・ヒストリー”をもってして，満洲国へ行った台湾人のあいだの，一定の傾向をはかることはできない。なぜならば，インタビュー開始年代が遅すぎた。しかも，対象者のほとんどが，台湾居住者であるが，おそらくは中国東北地方ないしは中国本土に残って，台湾に帰らなかったひと多いと想像される。

しかしながら，許女史らの熱心な努力の成果から，いくつかの興味ふかい

問題点が浮かびあがる。ある意味で、満洲国成立以前に中国本土での政治活動経験をもっていた謝介石などは、“満洲国の台湾人”を論ずる場合は、例外的な存在であろう。このテーマで対象となるのは、満洲国成立後にかの地へ赴いた台湾出身者である。この“オーラル・ヒストリー”に収録された人物のほとんどが、日本植民地下の台湾、ないしは日本、そして満洲国で高等教育をうけたひとたちである。かれらの知識・技術を生かす職場は、かならずしも台湾では多くはなかった。したがって、満洲国は、そうしたひとたちの受け皿ともなったと想像できるし、満洲国側も積極的に対応したのではなかろうか。注目すべきは、何人かの方は福岡で満洲国の採用試験をうけている。満洲国官吏・事業所では「満系」と「日系」のあいだに、明確な給与・待遇のうえで差別が存在していたが、この福岡で採用試験に合格したひとたちは、「入満」後、はたして「何系」に分類されたのであろうか。多民族国家といわれる、満洲国においては、「満系」、「日系」のほかにも、朝鮮系、モンゴル系、ロシア系という分類は存在した。しかし「台系」は存在しない。一步、間違えると、「大日本帝国の臣民」と規定されていた台湾人を、再び中国人と混同する、混同させる危険性があつたのではないか。ある意味では、朝鮮系以上に、むずかしい問題をはらんでいた。

さらに満洲国へ行った台湾人が眼にした、あるいは生活した「満洲」という地域社会の状況を、これら台湾人がどう認識したかという点にも興味がひかれる。おそらく“オーラル・ヒストリー”に登場するひとびとのほとんどは、その履歴からみて、日本語を社会生活言語としていた。しかも、かれらが会話可能な台湾語をもって、「満洲」の漢人とのあいだでコミュニケーションをはかることは、はなはだ困難であつたろう。かれらの故郷について、今日の発展した台湾をおもってはいけない。温暖、豊かな農村風景が、かれらにとって台湾の心象風景であり、台湾の原像ではなかつたろうか。それと「満洲」で眼にする光景とのあいだには、もともとは漢人世界のそれぞれが周辺地域であつたとしても、非常な隔絶が認知されたのではなかろうか。それでは、台湾を、「満洲」を、そして日本、「中国」をかれらの内面では、どのように位置づけていたのであろうか。

ともあれ、許雪姬女史の御努力により、台湾人の満洲国体験とはなんであつたか、このことを考察する基礎資料が提供された。なお、同女史は、すでに「在満洲国的台湾医生」という題目の研究論文を発表されている由だが、この方面に関する研究書も出版される計画とのことである。

最後に、中国からは、溥儀をはじめとする「偽満洲国皇帝、大臣、少将以

上官員共40人」が撫順戦犯管理所へ入獄していた時期に書いた供述資料が、中央档案馆編『偽満洲国的統治与内幕—偽満官員供述』（北京：中華書局、2000年）として出版されたこと、そして、これに先立つ関東軍将官・満洲国高官のソ連抑留問題に関しては、2001年10月16日、北海道大学スラブ研究センターで開催されたセミナー「日ソ戦争と戦後抑留の諸問題」に参加された、クズネツォーフ [С.И.Кузнецов]、カラセフ [С.В.Карасев] 両氏の報告論文である、“Интернирование в СССР высшего командного состава Квантунской армии, императора и правительства Маньчжоу-го” / 「関東軍将官、満洲国皇帝と政府高官のソ連への抑留」が、ロシア語原テキストに日本語訳文も添えて、『スラブ研究センター報告シリーズNo. 81』（2002年）のなかで、出版されたことも申し添える。

（なかみたつお：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）